

『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』における階級闘争分析の方法

—S・ホールの問題提起によせて—

北 村 寧

I S・ホールの問題提起

すでに別稿で論じたように、⁽¹⁾マルクスの階級概念には二つのレベルが存在している。一つは「生産関係レベル」であり、このレベルから階級は生産手段の所有関係によって区別された社会的集団と規定される。もう一つは「運動主体レベル」であり、このレベルから階級は特定の利害をもつ組織され闘争する社会的集団と規定される。階級概念を二つのレベルでとらえるということはマルクスに相異なる二つの階級概念があることを意味しているわけではない。マルクスの階級概念における二つのレベルは不可分に関連しているのであって、両者は統一的に理解されねばならない。

しかし、マルクスの階級概念における二つのレベルをどのように統一して理解するかということはそれほど簡単な問題ではない。確かなことは、いわゆる経済決定論的ないし経済還元主義的思考様式が厳しく批判され、その超克をめざす理論的営為が継続して試みられているということである。イギリスのマルクス主義的理論家S・ホールもこうした作業をすすめている一人である。彼は論文「マルクスの階級論における『政治的なもの』と『経済的なもの』」⁽²⁾において、マルクスの諸著作を検討し、階級概念の二つのレベルをどのように統一的にとらえるかという問題について興味深い考察をしている。その要点をまとめてみることにしよう。

S・ホールは『共産党宣言』（1848年2月刊行）と『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』（1852年5月刊行。以下、『ブリュメール18日』と略記する）とでは階級および階級闘争の理論的把握に大きな相違があり、後者は前者に比し格段の理論的前進が見られると指摘する。この二つの著作の間に横たわる歴史的事件は1848年の二月および三月

革命である。「1848年革命の歴史的挫折は、諸階級とそれらの政治闘争への関連という複雑な問題についてのマルクスの理解の仕方に、第一級の理論的前進をもたらした」。⁽³⁾その「理論的前進」とは何であろうか。まず、ホールは『共産党宣言』の問題点を次のように指摘する。

- (1) 資本主義社会の歴史的進行とともに、階級闘争がブルジョアジーとプロレタリアートの二大階級対立へと単純化していく、といった直線的な歴史認識＝「むきだしの歴史的進化論」。⁽⁴⁾
- (2) プロレタリアートを分裂もなく分化もしていない「階級主体」とみなすような、階級を全体的主体（集合的主体あるいは集合的行為者）として取り扱う傾向。
- (3) 資本主義的社会構成体を単一の構造とみなし、単一の矛盾（生産力と生産関係の矛盾）が、経済的土台から、直接かつ無媒介に他の政治的、イデオロギー的諸レベルへと展開していく、という考え方。こうした考え方は「経済的レベルから政治的レベルへの階級闘争の転化を何の疑いもなく取り扱っている」。⁽⁵⁾

ホールは以上の諸点をすべて拒否するとともに、前述の問題点(3)に関連してさらに述べている。「とくに、経済的なものの政治的なものに対する関係は、同様に、それらの必然的な差異と転位を通じて、一つの統一体の中に接合されたものとして概念化されなければならない。それゆえ、諸階級の『経済的』構成と『政治的』構成との間にはどのような必然的な直接的照応も存在しないのである」。⁽⁶⁾

明らかなように、ホールの強調点は上部構造の諸レベルを経済的土台と「直接かつ無媒介に」結びつけ、両者を「必然的な直接的照応」とみなす思考様式、すなわち経済還元主義を拒否することにあつた。だから、彼は『共産党宣言』の「決定的な弱点の一つ」を次のように指摘したのである。

「『宣言』は、正しくも、諸階級の経済的構成を、生産様式の発展諸段階に即して……中略……論じている。しかしそれは、経済的なものと政治的なものとの関係を、系統的に取り扱わぬ点において、致命的な欠陥をもっている」。(7)

こうした欠陥は、1848年革命の挫折を経て克服されるのであるが、それでは『ブリュメール18日』ではどのような分析が試みられているのであろうか。ホールによれば、『ブリュメール18日』の特徴は「資本主義の……中略……『客観的諸条件』を犠牲にして、『政治』を強調するという点にあるのではない」。(8)それどころか、「徹頭徹尾、政治的諸解決に対して客観的諸条件が下す『諸決定』を容赦なく採用している」。(9)これに続けてホールは言う。「マルクスが放棄したものは、なかなかなくなる仮定だが、経済と政治の二つのレベルが正確に照応するという仮定である」。(10)この点こそが『共産党宣言』と異なる『ブリュメール18日』の基本的な特徴である。

以上のような指摘の後に、ホールは『ブリュメール18日』の階級分析の特徴として次の諸点を挙げています。

- (1) 『共産党宣言』に見られるような「全体的階級」(11)は登場しない。全体の説明は資本主義的生産様式の基本的諸階級にもとづいて行なわれているが、二大階級で割り切るようなことはせず、それぞれの階級内部の諸分派にまで立ち入って分析している。
- (2) 階級諸分派は「孤立して政治の舞台上で機能するのではない」。(12)同盟または階級ブロックという鍵概念を使って、特定の階級諸分派を政治的、制度的形態と結びつけて考察している（例えば、「ブルジョア共和制」のもとでの階級諸分派の結合）。さらに、政治の舞台上で重要な役割を演じるが、それ自身は特別な階級的規定をもたない政治的諸勢力（軍隊、新聞記者、知的名士など）が明確に把握されている。
- (3) ある階級とその政治的代表者との関係について、両者を直線的に結びつけていないだけでなく、ある階級・分派の政治的利害が、他の階級・分派の政治的、イデオロギー的舞台で演じる役割を通して代表されうることをも明らかにしている。(13)

以上のように、『ブリュメール18日』における階級分析の諸特徴を指摘した後、ホールは関心の焦点である経済的なものと政治的なものとの関連（ホールの用語では「接合」）の問題に立ち帰って次のように述べている。

「政治的なものは経済的なもののレベルと結びついており、そして両者は……中略……その『生産様式』内で結合される諸力と諸関係によって、決定的な意味で重層的に決定される。……中略……それらが接合されていないということ、また、いかなる種類の『照応』も存在しないということをも主張するのは、史的唯物論の第一原理、すなわち、社会構成体を『複合的な統一体』、『諸関係の総体』としてみるという原理、を失うことである。しかし、その接合は、一連の転位と分解を通じてのみ達成されている。……中略……『政治的なもの』のレベルで『経済的なもの』を代表するには、これらの代表の形態と代表の過程を通じなければならない」。(14)

以上に見てきたように、ホールの問題意識の核心は階級の経済的構成と政治的構成との関連を、経済還元主義とは異なる方法で、どのように統一的に把握するかということであった。こうして、彼は『共産党宣言』においては階級の経済的構成と政治的構成とが「必然的な直接的照応」としてとらえられているのに対して、『ブリュメール18日』では「経済と政治の二つのレベルが正確に照応するという仮定」が放棄され、階級の経済的構成が「一連の転位と分解」を通して、「代表の形態と代表の過程」という媒介を経たうえで階級の政治的構成としてとらえているとし、ここに『ブリュメール18日』の理論的意義を認め、この著作に高い評価を与えたのである。

こうしたホールの見解はマルクスにおける階級概念の二つのレベルの関連という問題を考えるうえで示唆に富んでいるように思われる。本稿は、ホールの見解に触発されて、『ブリュメール18日』における階級分析をフォローし、そこでマルクスが階級概念の二つのレベルをどのように駆使し、両者をどのように関連づけているかを考察しようとするものである。

II 第二共和制における階級闘争の展開

周知のように、『ブリュメール18日』は「ある凡庸でこっけいな一人物が英雄の役割を演じることができるような事情や条件を、どのようにフランスの階級闘争がつくりだしたかを、証明しようとする」⁽¹⁵⁾という意図のもとに、1848年2月の七月王政の崩壊から1851年12月のルイ・ボナパルトのクーデターによる権力奪取までの経過（フランス第二共和制の時代）を分析した著作である。そこで、本書において、第二共和制における階級闘争の展開がどのように把握されているかを概観することにした。まず、本書の成立経緯を述べることにしよう。

1 『ブリュメール18日』の成立経緯

1848年2月24日にパリで二月革命が勃発した時、マルクスはブリュッセルで共産主義者同盟の活動に従事していた。3月3日にベルギー政府から国外退去を命じられたマルクスは臨時政府支配下のパリに移ったが、まもなく、ドイツで三月革命が発生したので、4月はじめ、エンゲルスとともにドイツに帰国した。ドイツ滞在は約1年2カ月に及び、この間、主として「新ライン新聞」に拠りつつ革命運動に身を投じた。49年6月、プロイセン政府の追放命令によって再びパリに戻ったマルクスは、フランス当局からプルトーニュ地方への追放命令を受け、ついに、8月下旬、終生の地となるロンドンに亡命した。

1850年はじめからマルクスは「新ライン新聞政治経済評論」の発行準備にとりかかるとともに、1月から3月にかけて一連の論文「1848年6月の敗北」、「1849年6月13日」、「1849年6月13日の結果」を執筆し、同誌第1、第2および第3号に掲載した（これらの論文は、45年後の1895年にエンゲルスによって編集された『フランスにおける階級闘争』の第1、第2および第3章として取り入れられた）。これらの論文は二月革命の勃発から51年3月10日の国民議会選挙での山岳党の進出までの経過を分析しており、その論調は来たるべき革命への期待で貫かれていた。

ところが、1850年の夏から秋にかけての頃、マ

ルクスとエンゲルスは革命情勢の認識について重大な転換を行なった。⁽¹⁶⁾すなわち、1847年にイギリスに端を発し、大陸諸国をも巻き添えにした経済恐慌は48年には基本的に終了し、イギリスでは48年から、フランスでも49年からは好況に転じたとの認識に立って、こうした全般的好況のもとでは革命は問題にならないと断じたのである。⁽¹⁷⁾このようなマルクスとエンゲルスの情勢認識は共産主義者同盟中央委員会において革命の早期待望論者であるウィリッヒおよびシャッパーたちからの激しい反発を招き、両派の対立が激化して同盟は組織的に分裂状態となった（同盟の解散は52年11月）。

1851年になると、マルクスは大英博物館で本格的な経済学研究に打ち込んだ。8月には『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』誌への寄稿者となった。そして、同年12月2日、ルイ・ボナパルトのクーデターが決行され、フランス第二共和制は解体された。ただちに、エンゲルス（当時マンチェスター在住）は12月3日付でマルクスに手紙を送り、このクーデターを「ブリュメール18日の茶番」⁽¹⁸⁾と呼んだ。ちょうどその時、マルクスとエンゲルスはドイツ出身の革命家でアメリカに移住したばかりのヨセフ・ヴァイデマイアー（ニューヨーク在住）から政治雑誌『ディー・レヴォルツィオン』に寄稿するよう緊急に求められていた。エンゲルスは12月16日付のマルクス宛の手紙で「まさに今こそあちらでは人々がフランスの事件に関する論評や手がかりを渴望しているのだ。そして、もし局面についてなにかはなばなしいものを載せることができれば彼（ヴァイデマイアーのこと——引用者）の事業は初号から成功を収めるのだろうが。ところが、ちょうどそれがむづかしいのだ。そして、例によって今度もこの難事は君に任せたいのだ」⁽¹⁹⁾と述べ、ボナパルトのクーデターの件について執筆するよう強く要請した。マルクスはエンゲルスの強い勧めで執筆を決断したらしく、はやくも、12月19日付のヴァイデマイアー宛の手紙で「いま私は机に向かって、君に送る論文を書いている」と述べ、12月23日に『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』を発送する旨書き送った。⁽²⁰⁾

こうして、『ブリュメール18日』は1851年12月19

日頃から書きはじめられ、翌52年3月25日頃には最終章(第7章)が完成した。⁽²¹⁾マルクスの原稿は出版までに若干の紆余曲折があったが、1852年5月19日、ヴァイデマイアーの手で『ディー・レヴォルツィオン、不定期刊行雑誌』第1号に全文掲載された。⁽²²⁾

2 階級闘争の展開過程

マルクスは二月革命の勃発からボナパルトのクーデターまでの全経過を大きく三つの時期に区分して論述している。『ブリュメール18日』第六章末尾の「歴史の一覧表」⁽²³⁾を参照しつつ、階級闘争の展開過程をフォローすることにしよう。

I 第一期。1848年2月24日(二月革命の勃発)から同年5月4日(憲法制定国民議会の招集)まで。これは臨時政府の時期である。

二月革命によりルイ・フィリップの七月王政は打倒され、ただちに臨時政府が組織された。臨時政府内に地位を占めたのは、(1)王朝的反政府派、(2)共和主義的ブルジョアジー、(3)民主主義的・共和主義的小ブルジョアジー、(4)社会・民主主義的労働者、である。臨時政府はこうした「種々の階級の妥協」⁽²⁴⁾として成立したが、多数派はブルジョアジーであり、ブルジョアジー主導の政府であった。

II 第二期。1848年5月4日から49年5月28日(立法国民議会の開催)まで。48年4月23日、普通選挙によって憲法制定国民議会の選挙が行なわれ、5月4日に同議会が招集された。第二期は「共和制の制定または憲法制定国民議会の時期」⁽²⁵⁾である。この時期はさらに三つに小区分される。

(i) 1848年5月4日から6月25日(プロレタリアの「六月反乱」敗北)まで。

憲法制定国民議会のブルジョア的性格が明確になるにつれて、プロレタリアはその解体を要求していたが、ついに、6月22日、パリの労働者大衆は武装して反乱に立ち上った。しかし、反乱はわずか数日で鎮圧され、プロレタリアは敗北した。この「六月反乱」は「プロレタリアートにたいするすべての階級の闘争」⁽²⁶⁾であった。勝利した「ブルジョア共和制」の側には、金融貴族、産業ブルジョアジー、

中間層(Mittelstand)、小ブルジョア(Kleinbürger)、軍隊、遊動警備軍として組織されたルンペン・プロレタリアート、知識分子、坊主、農村住民が味方した。パリのプロレタリアートの側には、彼ら自身のほかにはだれもいなかった。⁽²⁷⁾「六月反乱」は「現代社会を分裂させている二階級間の最初の大会戦であった」。⁽²⁸⁾

(ii) 1848年6月25日から12月10日(ボナパルトの大統領当選)まで。これはブルジョア共和派(共和主義的ブルジョアジー)が独裁的支配を行なった時期である。

ブルジョア共和派はすでにルイ・フィリップの時代から公然たる反政府派を形成していたが、二月革命の後、臨時政府において首相をはじめとする主要なポストを占め、憲法制定国民議会の選挙で大勝し、「六月反乱」を鎮圧して、支配の座に上りつめた。注目すべきはブルジョア共和派の階級的基盤であって、彼らはブルジョアジーの一分派ではあるが、特定の経済的諸条件(例えば、大土地所有、金融資本、産業資本など)を基盤として成立している党派ではなく、機関紙『ナショナル』を拠点とする共和主義的信条をもつ人々の集団であった。

他方、「六月反乱」の後、旧王党派は連合して秩序党を結成した。秩序党は大地主からなる正統王朝派と、金融貴族と大工業家からなるオルレアン派とを二分派とする「ブルジョアジーの連合」⁽²⁹⁾であって、急速に勢力を伸ばしていた。

かくして、11月4日、憲法制定国民議会は共和国憲法を議決した。新しい憲法にもとづいて、12月10日、大統領選挙が実施され、ルイ・ボナパルトが圧倒的多数の支持を得て当選した。

(iii) 1848年12月20日(ボナパルトの大統領就任)から49年5月28日(立法国民議会の開催)まで。この時期は「ブルジョア共和派の没落の歴史にあたる」。⁽³⁰⁾

大統領に就任したボナパルトは議会多数派のブルジョア共和派を無視して少数派である秩序党のオディオン・パロを内閣主班に任命

し、49年1月には憲法制定国民議会の解散を強行した。同年5月、憲法に規定されている立法国民議会の選挙が行なわれ、秩序党は大勝したが、ブルジョア共和派は少数派に転落し、かくて、ブルジョア共和派はボナバルトと秩序党の連合によって支配権を奪われるに至った。

III 第三期。1849年5月28日から51年12月2日(クーデター決行)まで。「立憲共和制と立法国民議会との時期」。⁽³¹⁾この時期は議会多数派の秩序党が山岳党を排除して全権を掌握したものの、ボナバルトとの対立を深め、ついに屈伏させられた過程である。この時期も三つに小区分される。

(i) 1849年5月28日から6月13日(山岳党の反乱)まで。

49年5月の立法国民議会の選挙で圧勝した秩序党は「政府権力と軍隊と立法機関、つづめていえば国家の全権力」を掌握した。⁽³²⁾秩序党と対立したのが山岳党である。この党は49年2月に小ブルジョアジーとプロレタリアートが連合して結成した社会民主党の議会内党派であった。議会では、ブルジョアジーの二分派の連合=秩序党と、小ブルジョアジーとプロレタリアートの連合=山岳党という二つの連合勢力が対抗関係を形成していた。同年6月13日、山岳党はボナバルトのローマ出兵に抗議して反乱を起したが、即座に鎮圧され、山岳党と小ブルジョアジーの勢力は大きく後退させられた。

(ii) 1849年6月13日から50年5月31日(普通選挙権の廃止)まで。「秩序党の議会的独裁」⁽³³⁾の時期である。

山岳党を排除した秩序党は議会で独裁的にふるまったが、ボナバルトは、49年11月1日、秩序党のバロ内閣を解任し、ボナバルトと秩序党の対立が表面化する兆しを見せた。だが、50年3月の補欠選挙で山岳党が大きく進出した。⁽³⁴⁾

この事態にボナバルトは態度を軟化し、秩序党に譲歩しようとしたが、秩序党は解任されたバロ内閣の再任命すら要求しなかった。他方、選挙で前進した山岳党もその勢いに乗

って秩序党を追撃しようとはせず、消耗な選挙戦にのめりこんでいた。秩序党は巻き返しに転じた。5月8日、秩序党は普通選挙権の廃止を骨子とする新しい選挙法を議会に提出し山岳党排除に乗り出した(5月31日に議決)。この選挙法はプロレタリアートの政治権力への参加を全く不可能にさせるもので「ブルジョアジーのクーデター」⁽³⁵⁾であった。ここにおいて秩序党の議会的独裁はその頂点に達した。

(iii) 1850年5月31日から51年12月2日まで。議会的独裁をふるった秩序党がボナバルトの攻勢によって崩壊状態にまで追い込まれ、ついにクーデターにより第二共和制そのものが終焉を迎えた時期である。この時期はさらに四つに小区分される。

(1) 1850年5月31日から51年1月12日(シャンガルニエ將軍の解任)まで。

新しい選挙法が通過すると、ボナバルトと秩序党の対立が再燃した。ボナバルトは軍の支配権を握ろうとして、51年1月12日に新しい内閣を任命し、秩序党(オルレアン派)のシャンガルニエ將軍を罷免した。議会=秩序党は軍の指揮権を失った。

(2) 1851年1月12日から4月11日(不信任された内閣の復活)まで。

秩序党はボナバルトに対する巻き返しをはかった。1月18日、秩序党は純粹共和派(ブルジョア共和派)および山岳党と連合し、新内閣の不信任決議を通過させた。しかし、これはボナバルトに対する打撃にはならなかった。ボナバルトは不信任された内閣に代って、いわゆる中間内閣=「たんなる番頭と書記の内閣」⁽³⁶⁾を任命し、ますます一身に権力を集中した。折から、フランスは商業恐慌に見舞われた。「強力な政府」を要望するブルジョアジーに応じてボナバルトは、4月11日、いったん不信任された内閣をあえて復活せしめた。議会=秩序党はボナバルト=執行権力の掌中で翻弄させられた。

(3) 1851年4月11日から10月9日⁽³⁷⁾まで。

51年5月には議会で憲法の存続か改正か

が問題になった。憲法の規定では、大統領の任期は52年で切れ、大統領の再選は禁止されていた。ボナパルト派はボナパルトの権力の延長をねらって憲法改正に賛成し、純粋共和派は憲法改正を共和制に対する陰謀とみなして反対したが、秩序党はその二つの分派間で抗争し、改正派と存続派に分裂した。同年、7月19日、憲法改正議案は446票（賛成）対278票（反対）で否決された（憲法改正には4分の3以上の賛成が必要）。秩序党はますます混乱し四分五裂となった。ここに至って二つの道が残された。ボナパルトの権力延長か、それとも、憲法にもとづくボナパルトの退位か。権力の延長をねらうボナパルトは内閣に普通選挙権の復活を通告した。

(4) 1851年10月9日から12月2日まで。

ボナパルトは議会に普通選挙権の復活（50年5月31日の法律の廃止）を提案した。しかし、11月13日、議会は355票対348票の僅少差でこれを否決した。これは四分五裂した秩序党の無能ぶりを如実に示した。議会は今や死に体であった。合法的な権力延長への途を閉ざされたボナパルトは、12月2日、クーデターを決行、国民議会は解散させられ、ここに第二共和制は最期をとげた。

III 階級闘争分析の諸特徴

前節で、二月革命の勃発からボナパルトのクーデターまでの階級闘争の展開をマルクスの行なった時期区分にしたがって概観した。このようなマルクスの階級闘争の分析にはどのような特徴が見出されるであろうか。ここでは、S・ホルの見解をも念頭に置きながら、階級概念における二つのレベルの関連という視角から、五つの特徴点を析出してみよう。

1 階級闘争分析の基本枠組

まず指摘できることは、当然のことながら、マルクスは階級闘争の分析において、明確に階級概念の二つのレベルを駆使しているということであ

る。マルクスにおいて、階級闘争の現実的主体である諸党派は、基本的には、資本主義社会を構成する三つの階級——資本家・賃金労働者・自営業者（中間層）——に根拠をもつものとして把握されている。換言すれば、運動主体レベルの階級は生産関係レベルの階級に依拠してとらえられているのである。それゆえ、諸党派間の闘争をとらえるにあたっては、資本主義社会における二大階級の対立を基軸としているのである。『ブリュメール18日』において、経済還元主義的、図式主義的傾向とは無縁な、柔軟性に富んだ階級闘争の分析が行なわれていることは確かであるが、それはあくまでも生産関係レベルから運動主体レベルの階級を把握するという基本枠組をふまえたうえでなされたものである。このことを、1848年2月24日に樹立された臨時政府を例にして考えてみよう。マルクスは『フランスにおける階級闘争』で臨時政府の党派（階級）構成および階級の性格について次のように述べている。

「二月のバリケードのうえにたちあられた臨時政府は、その構成上、必然的に、この勝利を分かちあった種々の党派(Parteien)を反映していた。臨時政府は、七月王座を協力して倒したものの、その利害関係は相敵対していた種々の階級の妥協(ein Kompromiß der verschiedenen Klassen)以外のものではありえなかった。政府の大多数はブルジョアジーの代表(Vertretern)からなっていた。共和主義的小ブルジョアジーはルドリュー・ロランとフロコンに代表され、共和主義的ブルジョアジーは『ナショナル』の人々によって代表され、王朝的反政府派はクレミュー、デュボン・ド・ルールその他によって代表されていた。労働者階級はわずかに二人の代表者、ルイ・ブランとアルベールをもっただけであった。最後に臨時政府におけるラマルティエヌ、これはさしあたりなんらの現実の利害も、なんらの一定の階級も代表していなかった。……中略……それにしてもこの二月革命の代弁者は、その地位からみても意見からみても、ブルジョアジーに属していた」。(38)

臨時政府の構成については前節でも述べたので重複するが、臨時政府は(i)王朝的反政府派、(ii)共和主義的ブルジョアジー、(iii)共和主義的小ブルジ

ョアジー、(iv)労働者階級という四つの党派(階級)の代表者によって構成されている(代表する階級の無いラマルティエヌを除外して)。このうち、(i)と(ii)はともにブルジョアジーの一分派である。このように、臨時政府を構成する四つの党派は資本主義社会の基本的諸階級(ブルジョアジー・プロレタリア・小ブルジョアジー)に対応するものとして把握されているのである。マルクスは複雑な構成と錯綜した関係をもつ現実の諸党派を資本主義社会の基本的階級関係だけで割り切ろうとはしなかったが、それらを資本主義社会の基本的階級関係にもとづいて把握するという基本枠組を堅持していたのである。

2 運動主体レベルにおける階級の複雑な構成

第二に指摘できることは、マルクスが運動主体レベルの階級を把握するにあたって、生産関係レベルの階級と対応させつつ、きわめて複雑な構成をもつものとしてとらえていたということである。これに関連して次の諸点を指摘することができる。

(1) 生産関係レベルにおける一つの階級を基盤にして一つだけではなく複数の党派が成立することである。例をあげると、前述の臨時政府を構成する諸党派のうち、王朝的反政府派と共和主義的ブルジョアジーは生産関係レベルでは同一の階級＝ブルジョアジーを基盤としていた。さらに、前節の時期区分の第二期にきびしく抗争しあった共和主義的ブルジョアジー(ブルジョア共和派)と秩序党もともにブルジョアジーを代表する党派であった。

(2) 一つの階級を基盤にして複数の党派が組織されるだけでなく、複数の階級を基盤にして一つの党派が組織されることである。この例としては山岳党をあげることができる。この党派は1849年5月の立法国民議会の選挙で躍進し、同年6月13日の反乱で大きな痛手を被ったものの、50年3月の補欠選挙で議席を大きく増やし、クーデターまで議会において一定の勢力を維持していた。山岳党＝社会-民主党についてマルクスは述べている。

「一八四八年六月事件のあとで、小ブルジョアは、自分たちの働きがいっこうに報いられず、自分たちの物質的利益が脅かされ、これらの利

益の実現を確かにくれるはずの民主的保障が反革命派によって危うくされるのを見た。そこで、彼らは労働者に近づいた。他方、彼らの議会代表者である山岳党は、ブルジョア共和派の独裁のあいだはわきに押しつけられていたが、憲法制定議会の生涯の後半期にボナパルトや王党派の大臣たちとたたかったことで、そのなくした人気をとりもどしていた。彼らは、社会主義の指導者たちと同盟(Allianz)を結んでいた。一八四九年二月に、仲直りの宴会が催された。共同の綱領が起草され、共同の選挙委員会が設けられ、共同の候補者が立てられた。プロレタリアートの社会的要求からは、革命的な尖端が折りとられて、民主主義的な言い回しが与えられた。小ブルジョアジーの民主主義的要求からは、純政治的な形式がはぎとられて、その社会主義的な尖端が表に出された。このようにして、社会-民主党が成立した」⁽³⁹⁾

こうして、マルクスは山岳党＝社会-民主党を「小ブルジョアと労働者の連合(eine Koalition zwischen Kleinbürgern und Arbeitern)」⁽⁴⁰⁾と規定した。山岳党＝社会-民主党は小ブルジョアジーとプロレタリアートという二つの階級を基盤にして組織された一つの党派であった。特殊な歴史的諸条件のもとで、複数の階級を基盤として一つの党派が成立したのである。

(3) 一つの階級を基盤として成立する党派は、その抛って立つ経済的諸条件の相違にもとづいて複雑に構成されることである。秩序党を例にあげよう。秩序党はブルジョアジーを代表する政党であるが、それは「一枚岩」の政党ではない。

「すでに述べたとおり、正統王朝派とオルレアン派は、秩序党の二大分派であった。……中略……ブルボン家のもとでは、僧侶や従僕を従えた大土地所有(große Grundeigentum)が統治していたし、オルレアン家のもとでは、弁護士や教授や雄弁家をお供につれた大金業業者、大工業家、大商業家、つまり資本(das Kapital)が統治していた」⁽⁴¹⁾

このように、秩序党は大土地所有者と資本という相異なる経済的基盤のうえに成立している二大分派を主たる構成要素としていたのであって、「連合した王党派」⁽⁴²⁾であった。マルクスは『フランス

における階級闘争』で秩序党の四つの分派(Fraktion)——産業的分派、金融的分派、大地主、カトリック派—to言及しているが、⁽⁴³⁾このように、秩序党という一つの政党がその拠って立つ経済的基盤にもとづいて複雑な構成をもつものとして把握されるのである。

(4) 党派が「一枚岩」ではないのであるから、一つの党派の内部に利害の異なるいくつかのグループが存在し、これらのグループ間で対立・抗争が行なわれることになる。秩序党がその典型である。秩序党は第三期において「議会的独裁」を行なったが、ボナパルト＝執行権力との対立のなかで、徐々に解体状況に追い込まれていった。とりわけ、1851年5月に憲法改正問題に直面してから秩序党の解体は一気に加速されるが、これについてマルクスは次のように述べている。

「議会の党がその二大分派に分解したばかりか、さらにその二つの分派のそれぞれが内部的に分解したばかりか、議会内の秩序党は議会外の秩序党と仲たがいをした。ブルジョアジーの代弁者や著作家、彼らの演壇や新聞、要するにブルジョアジーのイデオログとブルジョアジーそのもの、代表者と被代表者は、たがいに疎隔し、もはやおたがいに理解しあえないようになった」。⁽⁴⁴⁾

見られるように、マルクスは秩序党の分解について、(一) 議会の秩序党が二つの分派に分解したこと、(二) それらの分派の内部でさらに分解したこと、(三) 議会内の秩序党と議会外の秩序党が対立したこと、(四) ブルジョアジー自身とその代弁者(イデオログ)とが対立したこと、などを指摘して、これらの対立・抗争の具体的様相を叙述している。明らかなように、マルクスは階級闘争分析において、ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立という基本枠組に立脚しながらも、諸党派をめぐる闘争をその具体的な状況に即してきわめて多面的に分析していたのである。これがマルクスの叙述に独特の迫真力と説得力を与えているのである。

3 共和主義的ブルジョアジーの階級的基盤

第三に指摘できることは、マルクスにおいて、階級闘争の現実的主体である諸党派はその拠って

立つ経済的基盤にもとづいて把握されているが、諸党派とその経済的基盤とは直接的、必然的照応関係にあるものとして理解されていないことである。換言すれば、すべての党派が独自の経済的諸条件を基盤にして成立しているとは限らないのである。独自の経済的諸条件に立脚することなしに成立する党派が存在するのであって、しかも、こうした党派が階級闘争において重要な役割を演ずることがあるのである。この例が、第二期において「議会的独裁」をふるった共和主義的ブルジョアジー(ブルジョア共和派。その一分派としての純粋ブルジョア共和派)である。共和主義的ブルジョアジーとは次のような特徴をもっていた。

「この分派は、ルイ・フィリップのブルジョア君主制のもとでは、公けの共和主義的反政府派をかたちづくっており、したがって当時の政界の公認の構成要素であった。この派は議会に代表を送っており、新聞界にもかなりの勢力をもっていた。パリでのこの派の機関紙『ナショナル』は、それなりに『ジュルナル・デ・デバ』にとらず格式があるものと認められていた。この派の性格は、立憲君主制のもとで同派が占めていたこういう地位にふさわしいものであった。それは、大きな共通の利害で結ばれ、独特の生産諸条件をもっている点で他のものから区別されるブルジョアジーの一分派ではなかった。それは、共和主義的な考えをもったブルジョア、著述家、弁護士、将校、官吏の徒党であって、それがもっていた勢力は、ルイ・フィリップにたいする国民の個人的反感や、昔の共和制にたいする懐旧の情や、幾人かの夢想家の共和主義的信念にもとづいていたほか、なによりもフランス人の民族主義(Nationalismus)をもとにしていた……後略……」。⁽⁴⁵⁾

「『ナショナル』のブルジョア共和主義者は、なんら経済的基礎(ökonomische Grundlage)に立脚する、彼らの階級〔ブルジョア階級〕の大きな分派を代表していなかった」。⁽⁴⁶⁾

以上のように、共和主義的ブルジョアジーとは、独自の経済的基盤をもたず、「共和主義的な考え」と「民族主義」を共通の信条とする雑多な人々の集団であった。彼らは機関紙『ナショナル』を根拠としていたのでナショナル派とも呼ばれた。彼

らの集団は大土地所有とか金融資本といった特定の経済的基盤に立脚してはいなかったが、ブルジョアジーのイデオロギー的代弁者であって、ブルジョアジーの一分派にはかならなかった。

このような独自の経済的基盤をもたない集団が、臨時政府の時期（第一期）には首相はじめ重要ポストを掌握し、憲法制定国民議会の時期（第二期）には「議会的独裁」をふるい、少数派に転落した後も議会の一勢力として存続し（第三期）、かくして、フランス第二共和制の歴史全体を通じて非常に重要な役割を果たしたのである。もしも、マルクスが党派とその経済的基盤とを直接的照応関係ととらえていたならば、第二共和制の政治史における共和主義的ブルジョアジーの意義と役割とをあれほどまでにヴィヴィッドに分析することはできなかったであろう。確かに、マルクスはたんなる経済還元主義者ではなかった。彼は経済構造の次元と政治的・イデオロギー的次元とを相対的に区別し、後者が独自の論理をもつとみなし、その次元において階級闘争の現実的主体である諸党派を把握したのである。

4 階級とその代表者との関係

前述したように、マルクスはある党派とその経済的基盤とを直接的で必然的な照応関係にあるものとは考えなかったのであるが、これは階級とその政治的代弁者との関係についてもあてはまることである。すなわち、ある階級の代表者（党派のメンバー）というのは必ずしもその階級に属している人、あるいは、その階級の出身者であるとはかぎらないのであって、その階級以外の人々でも、当の階級に属している人々が実践的に到達している課題と解決に、理論的に到達するならば、当の階級の代表者といえるのである。マルクスは小ブルジョアジーとその代表者の関係について次のような卓抜した見解を述べている。

「また、民主党の代議士といえば、みな商店主か、さもなければ商店主のために熱をあげている連中だと考えてもならない。彼らは、その教養や個人的地位からすれば、商店主とは天と地ほどもかけはなれた人たちであるかもしれない。彼らが小ブルジョアの代表者であるのは、小ブルジョアが生活において越えない限界を、

彼らが頭のなかで越えないからである。したがって、小ブルジョアが物質的利益と社会的地位とに駆られて実践的に (praktisch) 到達すると同一の課題と解決とに、彼らが理論的に (theoretisch) 到達するからである。これが、一般にある階級の政治的および文筆的代表者と、彼らの代表する階級との関係である」。(47)

見てきたように、マルクスはある階級のもつ課題と解決に対して実践的にアプローチする人々と理論的にアプローチする人々を区別し、後者をもって当の階級の代表者とみなした。端的に言えば、マルクスは階級としての要求を実践的レベルと理論的レベルに区別したのである。だから、ある人物がある階級の代表者であるかどうかということは、当の人物が、当の階級に所属しているかどうかではなく、当の階級としての要求を理論的なレベルで表現しているかどうかによって決まるのである。

このように、マルクスはある階級とその政治的代弁者との関係を直接的な照応関係ではとらえなかった。ある階級とそれを代表する党派との関係は、党派のメンバーたちの出身階級・階層を探ることだけでは決して十分に明らかにはならないのである。大切なことは、階級を代表する人々の政治的、イデオロギー的見解を詳細に分析し、それが当の階級に属している人々の実践的、現実的要求をいかなる意味あいで理論的に把握したものであるかを解明することである。階級とその政治的代弁者との関係を、階級としての要求を実践的レベルと理論的レベルに区別するという論理を導入して把握しようとするマルクスの階級分析の方法は経済還元主義の水準をはるかに超えていると言わねばならない。(48)

5 階級闘争における諸党派の連合

最後に、マルクスは階級闘争の現実的展開を、二大階級の対立図式で単純に割り切るようなことはせず、諸党派・諸分派の組み合わせによってとらえていることを指摘しておきたい。階級闘争の現実には相対立する二つの党派が一对一で闘争するといったようなものではなく、多かれ少なかれ、連合した諸党派間の闘争である。第二共和制の各時期における諸党派の組み合わせ(連合の諸形態)

がどのようなものであったかを確認するために、くりかえしになるが、各時期における諸党派の対立関係を摘記してみよう（前節2参照）。

第一期。

臨時政府は「種々の階級の妥協」。⁽⁴⁹⁾しかし、主導権はブルジョアジーがもつ。

第二期。

- (i) 「六月反乱」は「プロレタリアートにたいするすべての階級の闘争」。⁽⁵⁰⁾小ブルジョアその他の党派はすべてブルジョアジーの側に結集。プロレタリアの敗北。
- (ii) 「純粹ブルジョア共和派の独裁」
- (iii) 「憲法制定議会と、ボナパルトおよび連合した秩序党との闘争」。議会を支配していた純粹ブルジョア共和派は、ボナパルトと秩序党によって排除され、少数派に転落。

第三期。

- (i) 「小ブルジョアとブルジョアジーおよびボナパルトとの闘争」。小ブルジョアジーとプロレタリアの連合である山岳党と王党派の連合である秩序党が闘争し、山岳党が敗北。ボナパルトはこの期も秩序党と連合。
- (ii) 「秩序党の議会的独裁」。
- (iii) 「議会内ブルジョアジーとボナパルトとの闘争」。議会で秩序党は純粹ブルジョア共和派および山岳党と連合してボナパルトと対決するが、憲法改正問題を機に急激な分解。ついに、ボナパルトがクーデターを執行。

一見して明らかのように、一つの党派が単独で支配しているのは、第二期-(ii)と第三期-(iii)の二つの時期ぐらいのものであって、その他の時期において、諸党派は各時期の固有の条件のもとで、多かれ少なかれ、さまざまな形態の連合をくりかえしながら、対立・抗争しているのである。こうした諸党派の連合を抜きにして階級闘争の現実的分析はできないのであって、S・ホールが述べたように、連合(Koalition)概念はマルクスの階級闘争分析における鍵概念の一つなのである。

ところで、マルクスにおいて、諸党派の組み合わせは決して恣意的にとらえられていたわけではない。第一期から第三期までに登場する諸党派は、大別すると、ブルジョアジー・プロレタリアート・

小ブルジョアジーという資本主義社会の主要な階級を基盤として組織されている諸党派と、これらの階級とは一定の距離をもつ独自の勢力(Macht)としてのボナパルト派⁽⁵¹⁾である。大局的に言えば、各時期における諸党派の対立関係はこれらの四つの種類の諸党派の固有の組み合わせとして把握されているのである。つまり、諸党派の組み合わせは資本主義社会の基本的な階級関係にもとづいて把握されているのである。このように、諸党派の現実的運動を資本主義社会の階級関係にもとづいて把握するという基本的見地に立脚したうえで、諸党派間の関係を連合概念を軸にしてとらえたことが、錯綜する政治史の過程を法則的に分析することを可能にした大きな理由であろう。

6 まとめ

これまで、階級概念における二つのレベルの関連という視角から、『ブリュメール18日』における階級闘争分析の特徴について論述してきた。ここで、マルクスの階級闘争分析における基本的特徴を確認しておこう。

第一に、マルクスは階級闘争の現実的展開を、資本主義社会の生産諸関係とそれに対応する階級諸関係にもとづいて分析した。⁽⁵²⁾別の言い方をすれば、運動主体レベルの階級を生産関係レベルの階級から把握した。これがマルクスの階級闘争分析の基本枠組である。

第二に、マルクスは上記の二つのレベルの階級が直接的、無媒介的に照応するとは考えなかった。実際にさまざまな利害をめぐって対立・抗争しあっている諸党派の運動は、生産関係レベルに還元しさえすれば理解できるというものではない(ただし、このことは生産関係レベルに還元しなくてもかまわないという意味ではない)。現実の政治運動は生産関係レベルの階級に還元するだけではとらえきれない独自性と多様性に満ちている。マルクスは、前述の基本枠組に立脚しながらも、政治運動の独自性や多様性を把握するために独自の作業を行なったのである。⁽⁵³⁾本節2, 3, 4および5で述べたことはそうした作業であった。

第三に、マルクスは政治運動の独自性・多様性を分析するためにいくつかの概念装置を使用した。主なものをあげれば、(1)階級(Klasse) —

党派 (Partei) 一分派 (Fraktion) という一連の概念によって、階級を単一・均質でなく、複雑な構成をもつものとして分析したこと、(2)政治運動の現実のみにない手をあらわす用語として、前述の階級—党派—分派のほかは勢力 (Macht) という概念を用いていること (ボナバルトを勢力概念でとらえていた)、(3)連合 (Koalition) 概念により諸党派間の組み合わせを分析したこと、(4)階級とその政治的代表との関係を定式化し、階級概念の二つのレベルの統一的把握のための基本的視点を確立したこと、などである。

蛇足ながら、こうした方法に依拠していたからこそ、マルクスは第二共和制の生成と没落というドラスチックで錯綜した政治史の展開を、法則的に、しかも迫真力をもって分析できたのである。マルクスの階級闘争分析の手法は現代社会の複雑な階級諸関係の分析のためにさらに発展させることが求められているといえよう。

おわりに

S・ホールの見解について若干のコメントをして本稿をしめくくりにする。まず、『ブリュメール18日』における階級闘争分析の特徴づけに関しては基本的に賛成である。さらに、『ブリュメール18日』における代表概念の重要性を指摘し、階級闘争の理論を代表の理論と解する彼の見解は大いに注目すべきであり、今後の理論的展開が待たれるところである。

しかし、私が異論を唱えたいのは、『共産党宣言』から『ブリュメール18日』への理論的前進に関するホールの考え方である。彼の見解をくりかえすことはしないが、彼が「理論的前進」といっている両著の相違は、階級闘争分析の基軸の転換を意味しているのではなく、むしろ、両著の分析次元の違いにもとづいているのではなからうか。両著のもつ分析次元の違いを無視しているのではないかというのが彼に対する私の批判である。

周知のように、『共産党宣言』は、共産主義者同盟が公表の目的で刊行した綱領的文書であり、そこには、近代ブルジョア社会の成立と発展、ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級闘争の進展、プロレタリア革命による共産主義社会の展望

が力強く叙述されている (とくに第1章と第2章)。つまり、『共産党宣言』は、階級闘争の見地から、近代ブルジョア社会の没落 (止揚) の必然性を論述したものである。ここに言う近代ブルジョア社会とは、イギリス・フランス等の特定の社会からの理論的抽象によって得られた概念であって、すぐれて歴史的、特殊な社会であるイギリス・フランス等の社会を直接にさし示すものではない。⁽⁵⁴⁾『共産党宣言』の分析次元はかかるものとしての近代ブルジョア社会に置かれていた。

これに対して、『ブリュメール18日』は二月革命の勃発からボナバルトのクーデターまでの、3年10月に及ぶ、マルクスにとっては、なまなましい現代フランス政治史を分析した著作である。本書の分析次元は、フランス第二共和制という特定の歴史的現実である。

以上のように、『共産党宣言』と『ブリュメール18日』はその分析次元を異にしていた。私は、ホールが指摘していた『共産党宣言』の数々の問題点は、実は、『共産党宣言』の分析次元に対応しているのであって、それらを「弱点」とみなすことは妥当でないと考える。一定の抽象度をもつ『共産党宣言』の諸命題は、歴史的現実の具体的分析である『ブリュメール18日』にストレートには持ち込まれなかったのである。⁽⁵⁶⁾

(註)

- (1) 北村寧「『即自的階級』と『対自的階級』に関する一考察」、『長野大学紀要』第4巻第1・2合併号、1982年9月、参照。なお、本稿は前掲拙稿の統篇的性格をもつものである。
- (2) A・ハント編、大橋隆憲・小山陽一ほか訳『階級と階級構造』(法律文化社、1979年)、15—85ページ。S・ホールのこの論文は『共産党宣言』や『ルイ・ボナバルトのブリュメール18日』ばかりでなく、『資本論』および『フランスの内乱』等の著作を検討し、マルクスの階級論を全体的に考察したものとなっている。以下に紹介するのは主として『共産党宣言』ならびに『ルイ・ボナバルトのブリュメール18日』に関するホールの見解である。
- (3) H・ハント編、前掲書、23ページ。
- (4) 前掲書、25ページ。
- (5) 前掲書、26ページ。

- (6) 前掲書, 29ページ, 傍点一ホール。
- (7) 前掲書, 35ページ。
- (8), (9), (10) 前掲書, 54ページ, 傍点一ホール。
- (11) 参考のために, この語に付した訳者たちの注を紹介しておく。「whole classes」は、「政治レベルに登場するのは階級そのものではなく, 政治勢力だ」とする見解と照応し, 「全体的主体としての階級」とでも解しえようか」(前掲書, 85ページ)。
- (12) 前掲書, 57ページ。
- (13) この例としてホールは山岳党=社会-民主党をあげている。山岳党については, 本稿第II節・第III節でも言及する。
- (14) 前掲書, 64-65ページ, 傍点一ホール。
- (15) K. Marx, Vorwort [zur Zweiten Ausgabe (1869) „Der achzehnte Brumaire des Louis Bonaparte“], *Marx-Engels Werke* (以下, *MEW* と略記する), Bd. 8, Dietz Verlag, S. 560. ([「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」第2版(1869年)への]序文, 「マルクス・エンゲルス全集」[以下, 「全集」と略記する]第8巻, 大月書店, 543ページ, 傍点一マルクス)。
- (16) この問題については淡路憲治『マルクスの後進国革命像』(未来社, 1971年)の第二章がぜひとも参照されるべきである。
- (17) マルクスは「評論 1850年5月-10月」(1850年秋に執筆)で言う。「このような全般的好況の場合は, ブルジョア社会の生産力がおよそブルジョアの諸関係内で発達しうるかぎりの旺盛な発達をとげつつあるのだから, ほんとうの革命は問題にならない」(Marx-Engels, *Revue*, Mai bis Oktober 1850, *MEW*, Bd. 7, S. 440. 「全集」第7巻, 450ページ)。なお, この「評論」のフランスに関する叙述(上記の引用文を含む)はエンゲルスによって「フランスにおける階級闘争」の第4章として収録された。だから, 革命情勢の認識の転換の前に書かれた前3章と, 転換後に書かれた第4章はその論調を大きく異にしている。この点についてはエンゲルスの「フランスにおける階級闘争」(1895年版)への「序文」参照(「全集」第7巻, 519ページ)。
- (18) F. Engels, Brief an K. Marx vom 3. Dezember 1851, *MEW*, Bd. 27, S. 379. (「全集」第27巻, 325ページ)。
- (19) F. Engels, Brief an K. Marx vom 16. Dezember 1851, ebenda, S. 391. (前掲書, 335-336ページ)。
- (20) K. Marx, Brief an J. Weydemeyer vom 19. Dezember 1851, ebenda, S. 595. (前掲書, 503ページ)。
- (21) マルクスは1852年3月25日付のヴァイデマイヤー宛の手紙で「ブリュメール18日」最終章を同封した旨記している(「全集」第28巻, 409ページ)。
- (22) 「ブリュメール18日」は1869年に第2版が刊行され, マルクスの死後, 1885年にエンゲルス校訂の第3版が刊行された。なお, 本書は「フランスにおける階級闘争」と一括されることが多いが, 両書の共通面とともに, その相違についても正当に認識する必要がある。両書の相違については古賀英三郎「マルクス=エンゲルスの革命論」, 田口富久治編『史的唯物論と現代 第5巻 国家と革命』(青木書店, 1978年), 79-96ページ, および淡路憲治『西欧革命とマルクス, エンゲルス』(未来社, 1981年)第1章・第2章, を参照されたい。
- (23) K. Marx, Der achzehnte Brumaire des Louis Bonaparte, *MEW*, Bd. 8, S. 192-193. (「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」「全集」第8巻, 188ページ)。以下の叙述においては必要に応じて「フランスにおける階級闘争」所収の諸論文も利用する。
- (24) K. Marx, Die Klassenkämpfe in Frankreich 1848 bis 1850, *MEW*, Bd. 7, S. 16. (「フランスにおける階級闘争」「全集」第7巻, 14ページ)。
- (25), (26) K. Marx, *MEW*, Bd. 8, S. 192. (「全集」第8巻, 188ページ)。
- (27) Ebenda, S. 121. (前掲書, 114ページ, ドイツ語挿入一引用者, 以下同じ)。
- (28) K. Marx, *MEW*, Bd. 7, S. 31. (「全集」第7巻, 29ページ)。
- (29) K. Marx, *MEW*, Bd. 8, S. 141. (「全集」第8巻, 134ページ)。
- (30) Ebenda, S. 131. (前掲書, 124ページ)。
- (31) Ebenda, S. 193. (前掲書, 188ページ)。
- (32) Ebenda, S. 137. (前掲書, 130ページ)。1849年5月の選挙で秩序党は全750議席のうち450議席を獲得して第一党となった。第二党は約210議席を占めた山岳党であった(中木康夫『フランス政治史』上巻, 未来社, 1975年, 130-131ページ)。
- (33) Ebenda, S. 193. (前掲書, 188ページ)。
- (34) 「フランスにおける階級闘争」の第3章は補欠選挙における山岳党の選出までで終了している。選挙での躍進を反映して, この選挙の意義を高く評価している。ちなみに, 補欠選挙で山岳党は改選議席30のうち20議

- 席を獲得した(中木康夫, 前掲書, 136ページ)。
- 35) K. Marx, ebenda, S. 157. (マルクス, 前掲書, 152ページ)。
- 36) Ebenda, S. 173. (前掲書, 168ページ)。
- 37) 1851年10月9日という日は時期を区分する日付となっているが, その根拠については「ブリュメール18日」でも十分に明確にはされていないようである。ただし, 「10月10日, ボナパルトは, 普通選挙権を復活させようという決心を彼の大臣たちに告げ, 16日に彼らは辞表を提出した」(前掲書, 184ページ)という叙述があるので, 10月10日については明確である。
- 38) K. Marx, MEW, Bd. 7, S. 16—17. (『全集』第7巻, 14ページ, 傍点—マルクス)。
- 39) K. Marx, MEW, Bd. 8, S. 141. (『全集』第8巻, 134—135ページ, 傍点—マルクス)。
- 40) Ebenda, S. 141. (前掲書, 134ページ)。
- 41) Ebenda, S. 138—139. (前掲書, 132ページ)。
- 42) Ebenda, S. 140. (前掲書, 133ページ)。
- 43) K. Marx, MEW, Bd. 7, S. 88. (『全集』第7巻, 85ページ)。
- 44) K. Marx, MEW, Bd. 8, S. 182. (『全集』第8巻, 176ページ, 傍点—マルクス)。
- 45) Ebenda, S. 124. (前掲書, 117ページ, 傍点—マルクス, 圈点(丸印)一引用者)。
- 46) K. Marx, MEW, Bd. 7, S. 59. (『全集』第7巻, 56ページ。〔 〕内は訳者が補ったもの)。
- 47) K. Marx, MEW, Bd. 8, S. 142. (『全集』第8巻, 135ページ, 傍点—マルクス)。
- 48) 階級とその政治的代表者との関係という問題に関する重要な論点としてボナパルトと農民の問題がある。「ボナパルトは, 一つの階級(eine Klasse), しかもフランス社会でもっとも人数の多い階級, 分割地農民を代表する」(前掲書, 194ページ, 傍点—マルクス)。ボナパルトと農民だけでなく, ボナパルトとその他の諸階級との関係, さらには, ボナバルティズムの問題が重要な論点として存在する。しかし, 本稿ではこうした問題について割愛せざるをえなかった。ボナパルトと諸階級との関係については淡路憲治『西洋革命とマルクス, エンゲルス』第二章が参考になる。
- 49) K. Marx, MEW, Bd. 7, S. 16. (『全集』第7巻, 14ページ)。
- 50) K. Marx, MEW, Bd. 8, S. 192. (『全集』第8巻, 188ページ。以下, 第二期・第三期までの引用文はすべて
- 188ページ)。
- 51) マルクスがボナパルト(派)を「勢力」と表現していることに注目したい。「この時期(第二期のこと—引用者)を終わる前になお二つの勢力(Mächte)をふりかえって見なければならぬ。……中略……ここに言っているのは, 一方のルイ・ボナパルトと, 他方の連合した王党派の党, 秩序党, 大ブルジョアジーの党のことである」(K. Marx, ebenda, S. 132. 前掲書, 125ページ)。
- 52) 生産諸関係と階級諸関係の区別と関連については北村寧「生産関係と階級関係のカテゴリー」『新しい社会学のために』第8号(現代社会研究会, 1975年10月)を参照されたい。
- 53) 山之内靖氏はマルクスの「二月革命分析」に関連して次のように指摘している。「さらに注目すべきことは, 革命の推移が, 諸階級対立を根底において規定している経済的必然性という次元をふまえながらも, それだけによって律し切れるものとしては分析されていないことであろう」(『マルクス・エンゲルスの世界史像』, 未来社, 1969年, 93ページ, 傍点—山之内)。
- 54) この点について, 北村寧「経済的社会構成体および社会構成体概念の理論的意義」, 服部文男編『講座史的唯物論と現代 2 理論構造と基本概念』(青木書店, 1977年), 235—236ページ, を参照されたい。
- 55) 念のため付言すれば, 私は, 『共産党宣言』から「ブリュメール18日」にかけて理論的前進が見られること, そして, それが1848年革命の挫折という体験と関連していることを否定しようとは思わない。ただ, 両著が階級闘争分析の方法というレベルで質的に断絶しているかのようにみなすことに賛成できないのである。むしろ, 『共産党宣言』の基本的諸命題は「ブリュメール18日」においても基本枠組として堅持されたいので, さらなる理論的前進が行なわれたのではないだろうか。